

Sumitomo Foundation News Vol.23

財団初となる研究発表会(環境研究助成)を開催しました

住友財団で初めてとなる研究発表会を2月に実施しました。

助成をするだけでなく、助成対象のその後の発展に繋がりたい、との思いから、各プログラムにおいて見直しを実施していますが、その一環として環境研究助成では、研究発表会を実施しました。助成対象である研究について、発表する場を提供し、選考委員との議論を通じて、その後の発展に繋げることを企図するものとして、選考委員会より提案があったものです。

2022年度の助成対象者の内、完了報告提出済みの研究者の中から、今後の発展が期待できる興味深い研究5件を選考委員に選んで頂き、住友会館で発表会を開催しました。

当日は、発表者と選考委員に参加者を限定したアットホームな雰囲気の中で進行し、一人あたり質疑応答も含めて約30分の発表が行われましたが、選考委員からの質問や意見が相次ぎ、活発な議論が展開されました。特に、専門分野外の選考委員からの質問に刺激を受けた、との参加者の声もありました。

その後に行われた懇親会でも選考委員と発表者との交流はもとより、発表者同士異分野の交流が盛り上がり、終了時間を過ぎても話が尽きない様子でした。

参加者からは、「選考委員と直接話ができたのは貴重な機会だった」、「頂いた意見や質問はどれも鋭く射っていた」、「異分野の先生とさっそく共同研究の話を進めることができた」等の声があり、ぜひ、今後も継続して実施していきたいと思っています。



研究発表会の様子

発表者リスト

名前	所属・肩書	研究テーマ
五味 良太	京都大学 助教	環境水中の細菌における薬剤耐性遺伝子の可動性に関する研究
位田 達哉	国土舘大学 准教授	廃木材を用いた3Dプリント内装建材に関する基礎的研究
中島 一豪 安藤 奏音	中央大学 教育技術員 釧路公立大学 講師	照明植生による龍泉洞の生態系への影響評価と利用者の印象評価に基づく管理計画の立案
辰野 宇大	北海道大学 助教	放射性微粒子が土壌固相-液相間の放射性セシウム移行、分配係数に与える影響
橋本 大志	国立極地研究所 助教	航空機ビッグデータを用いた高層気象観測システムの開発と品質管理手法の確立

主な活動内容(2025年2月～4月)

2月	環境研究発表会開催
3月	第69回理事会開催 * P2～4に記載の4つのプログラムの助成が決定しました。 (助成対象者リストは財団ホームページをご覧ください)
4月	2025年度 基礎科学研究助成・環境研究助成募集(～6月末まで)

国内文化財維持・修復事業助成

【2024年度助成先決定】

2024年度の「文化財維持・修復事業助成」は、116件の応募があり、46件、7,252万円が採択されました。昨年の応募は111件、採択は45件でしたので、応募数は5件増加、採択数は1件の増加となりました。ただし、昨年は継続申請を除く新規の採択が19件でしたが、今年は11件と8件減少しています。

【事例紹介1】

京都盲啞院(もうあいん)関係資料 京都府立盲学校(京都府京都市)所蔵

明治11年(1878)に創立された、盲・聾教育を行う日本最初の公立学校である京都盲啞院およびその後継学校に関する資料群です。我が国の盲・聾教育史ひいては近代教育史研究上に価値が高いとされ、平成30年(2018)に重要文化財に指定されています。

しかしながら、資料の中には傷みが進行しているものもあり、今回その一部について5カ年計画で修復を図ることになりました。



写真は、盲生用の針跡図(理科実験図)です。
拡大すると、針孔を連続させて作成した図があることがわかります。

【事例紹介2】

絹本着色 釈迦如来坐像図 石馬寺(滋賀県東近江市)所蔵



石馬寺は聖徳太子開基伝承を持ち、中世は天台宗寺院として栄え、江戸時代に臨済宗妙心寺派に転宗して現在に至る古刹です。

本図は、寺伝では「飯盛朱釈迦」と称され、仏鉢を持つ珍しい如来像です。彩色の方法、大衣の金泥文様などから朝鮮・高麗時代(14世紀)の作と考えられています。

文化12年(1815)刊行の「近江名所図会」の石馬寺の項に本図に関する記載があることから、19世紀前期には石馬寺に伝来し同寺を代表する什物として知られていたことがわかります。

希少性の高い高麗仏画として、東近江市指定文化財となっています。

しかしながら、本紙料絹の損傷の進行が懸念される状況にあり、特に、金泥が厚く塗られた肉身部は剥落が進み肌裏紙が露出して痛々しい姿になっています。今回、2カ年計画で修復を図ることになりました。



海外文化財維持・修復事業助成

【2024年度助成先決定】

2024年度の海外文化財助成は、19カ国(文化財の所在国では25カ国)からの43件の申請に対して、12件、3,321万円が採択されました。絵画8件、遺跡1件、書跡1件、工芸品1件、彫刻1件の構成で、うち日本の美術品が9件、日本以外が3件となりました。

【事例紹介1】

殷代青銅器(鷓鴣尊(しきょうそん))の修復 米国ミネアポリス美術館所蔵

修復対象は、米国所蔵の紀元前13～12世紀に遡る中国殷代の青銅器で、現存するふくろう型青銅器数点の一つとして非常に希少性が高いものです。20世紀初頭にバラバラの状態で見つかり、1950年米国に渡る前に組み立てられました。その可愛らしい姿は子供たちの人気を博しておりましたが、2023年4月に落下により大きなダメージを受けたため日本の工房へ移送して修復を行う予定です。



31.1cm x 18.3cm x 21.0cm
3.7kg
紀元前13～12世紀

【事例紹介2】

インド・ラダック地方エンサ寺の仏塔壁画の保存 (京都市立芸術大学 正垣雅子准教授)

修復対象は、インド・ラダック地方北部のヌブラ渓谷にあるエンサ寺院にて2020年に発見された仏塔壁画です。その描写表現は7世紀ごろの古い様式と共通点が見いだされるものですが、ラダック地方および周辺一帯では、最古の仏教壁画となり、かつ同地域で仏教が盛んになるのは10世紀ごろとする従来の学説を覆す可能性がある貴重な資料です。

現状、崩れた仏塔の下に位置する壁画に対して暫定的な保全措置が講じられておりますが、十分ではないため、早急に保全環境の改善を行うとともに、壁画の彩色層の材料調査を行い、剥落止めや支持体の補強など応急措置を実施していく予定です。



向かって正面の壁には説法印を結ぶ如来坐像と両脇に菩薩坐像、右側の壁には蓮台に座す菩薩像が描かれております。右は菩薩坐像の拡大写真となります。



アジア諸国における日本関連研究助成

2024年度の助成は、2024年9月～10月に公募し、21の国・地域から891件(倍率13.5倍、前年度比38件増)の応募がありました。例年以上に東アジアからは質の高い申請が多く寄せられ、東南アジアや南アジアからも採択水準を充分クリアする応募が寄せられました。1月の選考委員会では、日本との相互理解に資するかを最重要評価項目とし、研究内容のレベルや独創性などを勘案した上で選考され、3月の理事会にて66件、5,025万円が採択されました。採択者の国籍は、中国16件、台湾8件、韓国7件、東南・南西アジア9か国から35件。採択された研究の中から3件をご紹介します(カッコ内は助成金額)。

- (1)研究テーマ:『学問と政治:昭和前期の日本神話学を手がかりに』(100万円)
採択者: 高偉 (Wei GAO) 中国 深圳大学 外国語学院 副教授
内容: 本研究は、昭和前期の松村武雄、松本信広、三品彰英、中島悦次らの神話学を対象に学問がいかに政治のために曲げられていたかを探り、同時期の日本神話学の位置づけをすることを狙いとする。
- (2)研究テーマ:『15世紀から17世紀にかけての琉球王国とジャワ島における王国関係の再検証』(70万円)
採択者: アクバル・リズキ・ディア・ハビビ インドネシア ガジャマダ大学 文化科学学部 講師
内容: 本研究は、15世紀から17世紀の琉球王国とジャワ島における王国関係を再検証するもの。両者の関係を明らかにすることにより、東アジアと東南アジアの海上ネットワークの理解を深める。
- (3)研究テーマ:『ラオスと日本の多文化教育における教員教育の比較研究』(50万円)
採択者: ソムメイ・シンパチャン ラオス カンカイ教員養成大学 講師 (他1名)
内容: 本研究は、ラオスと日本における多文化化が進む学校教育の現状と課題についてフィールドワークを通じて明らかにし、多文化教育に対応できる教員の育成、研修のあり方を両国の比較を通じて導き出す。

修復文化財展示事業助成

文化財維持・修復事業助成に関連する新規の助成プログラムとして2024年度創設された修復文化財展示事業助成は、今回初めての公募を行いました。初年度の応募件数は4件、総額964万円となり、予定の5件、500万円に比べると、件数は若干少ないものの、申請金額は高額になっていました。選考の結果、応募のあった4件はいずれも助成が望ましいと考えられるものであったことから、1件当たりの助成金額の上限を150万円とすることで全件、547万円の採択となりました。

【事例紹介】

助成対象:岡山大学
倉敷市楯築遺跡特殊器台修復記念展示会事業
展示会場:岡山大学考古資料展示室

倉敷市楯築遺跡特殊器台は、1979年に岡山大学による楯築墳丘墓第3次調査によって出土した弥生時代の土器で、「埴輪の起源」としても注目されています。出土後復元作業が行われて保管されてきましたが、50年近くが経過し、修復箇所の劣化が進んだことから住友財団の助成を受けて2024年度に修復が行われました。

修復費用の調達には、クラウドファンディングも活用され、市民の関心も高いことから、修復が完了した後は、修復完成披露の展示会が計画されていました。

助成金を活用し、最新研究を反映した新しい展示パネルの作成、今回の修復事業の意義を解説する特殊器台に関する講演会の実施等が企画されています。展示会は、2026年3月に開催予定です。



修復前の特殊器台